The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	アトピー性皮膚炎患者のQUALITY OF LIFEに関する研究 : SF-36を用いて
Author(s)	福録, 恵子
Citation	大阪大学, 2003, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/43922
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【5】

氏　　名	福　録　恵　子（ふく　ろく　けい　こ）
博士の専攻分野の名称	博　士（保健学）
学位記番号	第　17705　号
学位授与年月日	平成15年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 医学系研究科保健学専攻
学位論文名	**アトピー性皮膚炎患者のQUALITY OF LIFEに関する研究：SF-36を用いて**
論文審査委員	（主査） 教　授　早川　和生 （副査） 教　授　荻野　　敏　　教　授　大野ゆう子

論文内容の要旨

［目　的］

アトピー性皮膚炎は、掻痒の強い湿疹を伴い、長期にわたり寛解と増悪を繰り返す慢性疾患である。我が国において、人口の15～20%がアトピー性皮膚炎の素因をもつといわれている。様々な環境において種々の病態が関与する多因子性の疾患であるが、いまだその本態は明らかにされておらず、治療や対応方法も確立されているとはいい難い。大半の患者は思春期までに自然治癒すると言われているが、近年思春期以降も治癒しない例や、思春期以降にはじめて発症する成人型アトピー性皮膚炎の増加や重症例が増加している。また思春期から青年期の重症患者に、眼科合併症であるアトピー性白内障が好発するなどの問題が多い。

近年、疾病治療に際し、精神面や日常生活の問題などを含め、生活の質（QOL）も踏まえた医療の必要性が求められている。そのため臨床症状の改善や悪化とQOLとの相関や、QOLの各構成要素が受ける影響について、明確にする必要があると考えられる。アトピー性皮膚炎患者は、掻痒や湿疹のために日常生活が障害され、二次的に心理面に影響を及ぼすことから、ストレスとの関係も深く、QOLの精神面へ及ぼす影響を重要視すべきであると思われる。そこで今回、SF-36を用いてアトピー性皮膚炎患者のQOLを包括的に評価するとともに、1年間の治療による有効性との関連、アレルギー性鼻炎患者とのQOL比較などについて検討を行い、アトピー性皮膚炎患者のQOL向上および看護援助に役立つ情報を得ることを目的とし検討をおこなった。

［方法ならびに成績］

・方法

豊中市の長野皮膚科医院を2000年11月から2001年2月にかけて受診した患者のうち、日本皮膚科学会による診断基準に基づき、アトピー性皮膚炎と診断された16歳以上ものを対象とした。調査期間内に受診した対象患者うち有効回答が得られた281名（有効回答率91%）（内、男性143名、女性138名）を調査対象とした。同一の皮膚科専門医師による重症度判定は「アトピー性皮膚炎治療ガイドライン」に基づき、軽症から最重症の4段階に分類された。このうち、重症度が中等症から最重症の者に対して、1年後の2001年11月から2002年2月に追跡調査できた152名のうち、有効回答が得られた145名（内、男性78名、女性67名）を調査対象とした。

SF-36（MOS 36 items short form health survey）は健康関連QOLを測定する包括的尺度であり、IQOLA

(International Quality of Life Assessment) はSF-36を世界各国で翻訳し、文化的、計量心理学的にその国々での妥当性を検討する国際プロジェクトを展開し、現在25カ国以上がその対象となっている。

SF-36実施時の手順として、外来受診した患者に対し、倫理的考慮として、主治医より患者に対して、研究への参加意思の有無について承諾の得られた場合のみ、SF-36（日本語版）質問票を渡し記入方法を説明し、診察待ち時間などを利用して記入してもらった。

分析方法に関しては、SF-36日本語版ver. 1.2スコアリングプログラム（エクセル版）の使用によりスコアリングを行った。その後統計解析にはSPSSを用い、t検定を行い、有意水準は$p<0.05$とした。

・成績

重症度および痒みの程度による比較において、いずれもSF-36 QOLスコアにおいて群間差が認められ、それぞれ背景因子との関連性も認められた。身体各部位における痒みに関しては、痒みの部位と痒みの部位合計数による比較検討から、他の部位と比較して特に首の痒みがQOLスコア低下の一因となることが推測され、痒みの個所が多いほどさらに影響が大きくなることが認められた。そして首を含む露出部位に関しては、中等症男女の比較から、女性のQOLの有意な低下が認められた。他のアレルギー疾患との比較では、急性疾患とみなされるスギ花粉症患者が最もスコアが低下していたが、慢性疾患である通年性アレルギー性鼻炎患者とは、同等あるいはそれ以上のQOL障害があると考えられる。

また治療による経時的変化とQOLの関係を、SF-36 QOLサマリースコアにより検討した結果、自覚症状の悪化は精神的健康度への影響の大きいことが認められた。痒みの変化では、特に改善により有意差が認められることから、痒みの改善が身体的健康度および精神的健康度を上昇させうると考えられる。また睡眠状態の変化もQOLに大きく反映しており、特に精神的健康度への影響の大きいことが認められた。

［総　括］

SF-36を用いて、アトピー性皮膚炎患者のQOLへの影響因子および経時的変化とQOLとの関係を明らかにすることができた。痒みによる掻破は、皮膚病変の悪化や遷延化を招き、さらにかゆみが増すitch scratch cycleという現象を生じ、これはアトピー性皮膚炎の難治化の一因になっていると考えられている。今回の結果より、痒みのコントロールはきわめて重要であると結論でき、患者自身がセルフケアを確立させるために、ストレスコントロールや掻破に対する指導を含めた適切な対応が重要である。アトピー性皮膚炎患者の抑うつ状態を合わせ、今後さらに精神症状と心理的要因についての縦断的研究によるQOLの検討を行っていきたい。

論文審査の結果の要旨

アトピー性皮膚炎は、増悪・寛解を繰り返す掻痒のある湿疹を病変とする疾患であり、様々な研究や解析にもかかわらず、いまだ治療や対応方法が確立されているとは言い難い。

今回、国際的に認知されている包括的尺度SF-36を用いて、アトピー性皮膚炎患者のQOL評価を行った結果、様々な因子による精神的健康度への影響が大きいこと、および抑うつ状態とQOLの検討から、背景因子との関連性を明確にしえた。

以上より、本論文はアトピー性皮膚炎患者のQOL向上において、精神的なアプローチが重要であることを指摘しえたなど、看護援助に役立つ極めて有意義な結果を得たことから、学位の授与に値すると考えられる。